

# 埼玉育ちのグローバル人

## 日本からロシア、そしてハンガリー



埼玉県マスコット  
「コバトン」

### 第3回 「ブダペスト時代」

ロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所研究員

木村 香織さん



2013年に博士号を取得すると、ハンガリーのブダペストに移った。ハンガリー政府奨学金に受かり、ポスドクで研究を続けることができる事になったのだ。もちろんモスクワに残る道もあったが、当時付き合っていた現在の夫が住むブダペストに移り住む道を選んだ。研究費がハンガリーからであるというのも移住を決めた理由の一つだった。その後は、モスクワのロシア科学アカデミー・スラヴ学研究所でリサーチ・アシエイトのポジションに就き、モスクワと行き来しながら生活している。

ブダペストでの生活もモスクワ時代とあまり変わることなく、図書館や公文書館に通い文献を読み、家で論文などの執筆をしている。国際学会で発表したり、頼まれて講義をしたりもする。モスクワ時代から始めた趣味のスポーツチャンバラはハンガリーにはなかったもので、自分で希望者を募ってチームを作り稽古している。近隣ではセルビアやルーマニア、スロバキアやチェコ、ポーランドにもスポーツチャンバラをやる仲間がいるので、年に数回はお互いの国を行き来しながら合同稽古会や試合を開催している。スポーツチャンバラが国際交流する手段の一つになっているのは、やっつけてよかったなと思う点である。ロシア語を話す環境ではなくなったため、言語維持のため、ブダペスト市内のロシア文化センターのロシア語クラスに週二回通っている。たまに夫が経営している日本食

レストランの手伝いをする。ハンガリーでの生活はこんな感じである。そう、ロシアがウクライナに侵攻する前までは。



ハンガリーのスポーツチャンバラの仲間と  
(筆者は左から2番目)

2022年2月24日、ロシアがウクライナに侵攻した。当日のことはよく覚えている。朝起きると夫から「キエフが攻撃された」と聞かされた。その日は1日何も手がつかず、書斎でニュースばかりを追っていた。

そんな無気力な状態が数日続き、そんな状況を打破しないといけないと思い始めた。そして自分が、何ができるのかを考え始めた。ウクライナの隣国ハンガリーでは、連日ウクライナからの難民が押し寄せてきているというニュースが流れている。ロシア語に関わってきた自分ができること、それは彼らの道しるべになることだと思ったのだ。ハンガリーで難民支援を行な

っているNPO・慈善団体を調べ、そこに連絡を取り、履歴書を送った。そして、彼らのボランティア活動に正式に参加できることになった。

初めてボランティアに入ったのは、ブダペストの西駅であった。そこには難民支援のためにホールが一つ解放されていて、NPO・慈善団体の支援ブースが置かれていた。日に数回、ウクライナ・ハンガリー国境の街から沢山の難民を乗せた列車が到着すると、駅は難民たちでごった返した。最低限の荷物だけを持ちブダペストに到着した難民たちに、生活用品や食料を提供した。支援物資の大半は市民や企業からの寄付で賄われた。朝昼晩の食事の時間が近くなると、サンドウィッチやランチボックスなどを作り、NPO・慈善団体の支援ブースに届ける市民も多くいた。また、ウクライナ語・ロシア語を話す市民の中には個人で自発的に駅のホームに立ち、個人ボランティアとして通訳をする者も多く見受けられた。



ウクライナ難民支援ボランティアの時

私はロシア語を話すので、通訳・案内の仕事をした。ブダペストに到着するウクライナ人の大半はそこから移動する人たちだった。彼らは今何が必要なのか、どこに行けばいいのか、どんな手続が必要なのか、彼らの話を聞いて、必要な場所に案内した。NPO・慈善団体のボラン

ティア活動に加わることができることになったとは言え、リアルタイムで起こっていることに対応しなければならないため、日々の情報のアップデートは大変だった。団体から必要な情報が下りてくるシステムが整っていたわけではなかった。シフトに入る前夜には、日々更新されるハンガリーの難民対策関連の最新情報（難民申請の仕方、聞かれうる国の大使館情報の把握とそこへの行き方、主なヨーロッパ諸国の難民関連の政策など）を調べ、できる限りを把握するようにした。その後、ブダペスト空港にもNPO・慈善団体の難民支援ブースが設置されることになり、ロシア語話者はそちらに行くよう勧められた。空港の方がより言語力を求められたので、私の主な活動場所は徐々にそちらに移行していった。

空港の難民支援ブースでは航空券購入やチェックインの手伝い、航空会社とのやり取りの手伝いなどの仕事をした。支援ブースで軽い食事を提供したり、すでに行き先が決まっている難民には、団体を通じて宿泊場所の斡旋をしたりもした。空港のボランティアに入れる人は最低でもウクライナ語・ロシア語・英語が話せる必要があったが、それでも一回のシフトに入るウクライナ語・ロシア語話者は2-3人で、食事を取る暇もないくらいに忙しい日が続いた。

活動を通じて難民たちから色々な話を聞いた。キエフから来た女性は「キエフの街にロシア兵はいないけど、ロケット弾が降ってくる。大きな音が聞こえると今でもドキッとして動悸が激しくなる。子供はすごく怯えているの」と話っていた。ハリコフから来た女性は「酷い銃撃戦で命からがら逃れて来た」と言った。「キエフの家が破壊された。夜になると涙が溢れて止まらない」と話した方もいたし、「爆弾が降っている下でなんか暮らせない」と言った方もいた。「自分が乗るはずだった列車に爆弾が当たった。あれに乗っていたら私はここにいなかったら」と語る女性や「子供たちが避難していた劇場が砲撃を受けた。どうしてそんな事

ができるの…」と子供の前なのに泣き出してしまったお母さんもいた。逃れて来た人たちにはそれぞれ故郷を去らなければいけなかった理由があった。みんな笑っているが、少し話しているとポロポロと身の上話を語り始める。私は黙ってそれを聞く事と少しの手助けしかできなかったが、別れる時に「ありがとう」と笑顔で言われた時、私のやっている事にも意味があるのかなと思えた。

ウクライナからの難民も減って来た8月末、空港の難民支援ブースは閉鎖された。12月現在、空港に出向いてウクライナ難民支援ボランティア活動をするという必要はないが、難民支援ブースと一緒に活動した人たちとは今でも連絡を取り合い、必要があればそこに出向いて手伝いをしたりしている。ウクライナ支援ボランティア活動を積極的に行っていたのは2022年2月末から8月末にかけてであったが、活動から多くのことを学び、考えた。その中で同じブースでボランティアをしていた女性が言った言葉が特に印象に残っている。

「ハンガリーでは私の年代は学校でロシア語が必須科目だった。私たちハンガリー人には強制的にロシア語を学ばされているという感覚があったから、いやいややっていた人も多くて。私はロシア語が好きでロシア語の先生になったのだけど、今思うと、私がロシア語を学んだのは、このボランティア活動に参加するためだったんじゃないかという気がする」

私はボランティアを始める時、私の語学力をボランティアという形で社会に還元できればという気持ちで始めた。しかし、活動していく中で、どうも単に「還元したい」という事ではないのではないかという事に気付いた。高校生の頃からロシアの文化に興味を持ち始め、大学でロシア語・ロシア政治を学び、大学院はモスクワ大学を選び、卒業後もモスクワの研究所でやってきた。私にとってロシアは単なる研究対象ではなく、「自分の意思で選んだ第二の故郷」と言っていけるだけの存在なのだ。そんな「第二の故郷」が始めてしまった戦争。私には今回の戦争に対してある程度の当事者意識があるのだということに自覚した。その戦争の被害を受けている人たちが、今自分が住んでいる場所に逃げて来て困っている。不安いっぱい逃げている人たちに少しでも安心してほしい、役に立ちたいという思いがあったのである。

人生において全ての事象はつながっている。埼玉で生まれ育ち、ロシアと関わり、今ハンガリーに住んでいる自分。私がロシア語を習得したのはこのボランティアに参加する為だったとまでは思わないが、何か因縁にも似た過去の「繋がり」を感じる。これから先のことはまだ分からないが、その瞬間瞬間にやりたいこと、やるべきことを大切に、常に考え、自分の心の声に耳を傾けながら生きていこうと思う。



ブダペストのライトアップ  
ウクライナとの連帯を表している